



令和 6 年 4 月の地震からの教訓

岡内 晴美

令和 6 年 4 月 17 日午後 11 時 14 分 携帯電話から緊急時の警告音がけたたましく鳴り響きました。うとうと眠り始めていた時間でしたが、思考能力も無防備で理解できず布団の中で横になっていたところ下から突き上げられる感じがありました。「南海トラフ巨大地震だ」と、一人つぶやきながらテレビをつけると香川県東部が震度 3 の地震情報で徐々に情報がでて豊後水道を震源とする地震で、愛媛県と高知県で震度 6 弱の揺れを観測したそうです。気象庁によりますと、愛媛県と高知県で震度 6 弱以上の揺れを観測したのは、現在の震度階級が導入された 1996 年以降初めてだそうです、南海トラフ地震ではありませんでした。

幸い高松は、一度の揺れで収まりましたが、震度 6 を観測した地域は、食器棚からお茶碗やお皿などの唐津物が飛び出し歩く場所がない状態の家がテレビのニュースで映りました。



今後の教訓として、南海トラフ巨大地震に備

え、夜間の地震が起きれば真っ暗な中をそれぞれが避難することになります。

こうした状況を想定した訓練を行い一人ひとりが避難場所を知っておくことで、独りでは避難できない利用者をどうやって支援するのかなど、利用者の課題を抽出することもできるため、日ごろから悪い条件を想定した避難訓練を積み重ねておくことが非常に重要だと思いました。

さらに「たとえ避難しなくてよかった状況だったとしても『無駄だった』と思うのではなく、『何もなかったけどよかったね』と言い合えるようにしていくことが大切だ」と、思いました。そのうえで「発生が懸念される南海トラフ地震が起きれば、公助がなかなか来ないことも想定されます。今回の地震を教訓に、一週間分の水や食料などの備蓄や家具の固定、避難経路の確認など一人ひとりが事前の備えを進めることが必要だと思いました。

